

**留学先国名 : UAE**

**留学先校名 : New York University Abu Dhabi**

**専攻 : 公共政策専攻・心理学副専攻**

**留学期間 : 2017年8月23日 ~ 2021年5月15日**

ニューヨーク大学アブダビ校での生活は、とても刺激に満ちている。学生の4分の3が留学生であり、世界中から優秀な学生が集う環境で毎日生活をしていると、毎日が新しい発見の連続だ。それは、レバノン系移民の友人がアザーンの音とともに礼拝を始める姿から、パナマ人のルームメイトのスピーカーから流れるラテン系の音楽まで、多岐にわたる。

初めての授業は、「偏見」という題名のクラスだった。Core Colloquium という、日本の大学でいう一般教養のようなもので、学際的な視点を養うことが目的の授業である。簡単にいえば、この授業はそれぞれの講義までに課される読み物をもとに、自らの経験を交えディスカッションをする75分間である。アメリカ人の心理学の教授が教鞭をとっているが、この授業では「偏見」について文学的・政治的・社会的・心理学的視点から見る。議論の焦点はマルコム X の自伝やヒトラーのメイン・カンブから、心理学の論文や CM・ハリウッドの人種問題などだった。

大学一年目を振り返り、この授業が特に印象に残っているのは、その題材の面白さがゆえだけではない。この授業は、日本ではなくこの大学で学ぶことにこそ意義があったからだ。その授業に集う20人弱の学生の全員が異なる国から来ていた。インド、ニュージーランド、パラグアイ、ルーマニア、ナイジェリアなどで育った経験から人種・ジェンダー・差別・偏見について議論し合う。

多様性とは、単に多くの意見を聞ける機会を提供するだけでなく、人々に平等な発言権を与えることも意味する。アパルトヘイトについて議論するにも、過半数が白人または黒人、という場での議論は、おそらく偏った意見しか発せられない、または少数派の意見を抑圧することにつながりかねない。世界中から学生が集まるこの大学では、皆がマイノリティである。そのような環境は、すべての学生に平等な発言権を与えるのだ。

日本人ばかりの環境で学び、多数派として生きてきた私にとって、留学生として少数派になることは勇気を要した。しかし、大学に来て、少数派になることは必ずしも抑圧される存在となるのではなく、発言権を与えられるということでもあった。やはりこの大学に来てよかったな、と思うのは、これほど多様性に満ちた場所は他に存在しないという確信からだ。

これから留学する人には、留学先の大学にいる自分はどのような立場となるのか、それは自分にとってどのような影響をもたらすかなどについて考えてもらいたい。日本でできない経験だからこそ、それを通じて何を得ると期待するのかを意識すれば、より有意義な留学生活となるだろう。